

古い葉書は語る

就職 25 年記念の絵葉書

札幌農学校開校以来、主として米人教師が担当していた農芸化学の分野に、明治 22 年 (1889)、初めて日本人の専任教授が赴任した。吉井豊造先生である。

氏は明治 18 年、駒場農学校を首席で卒業した逸材であった。同校の助教授などを勤めたのち、21 年、北海道庁に勤務、翌年、アメリカに帰ったストックブリッジの後任として、農芸化学を担当することになった。

以来、土壌肥科学、農産製造学を中心に学内外で目覚ましい活躍をし、北大農芸化学の基礎づくりに貢献したが、大正 8 年、惜しくも偉業なかばにして 59 歳で他界された。

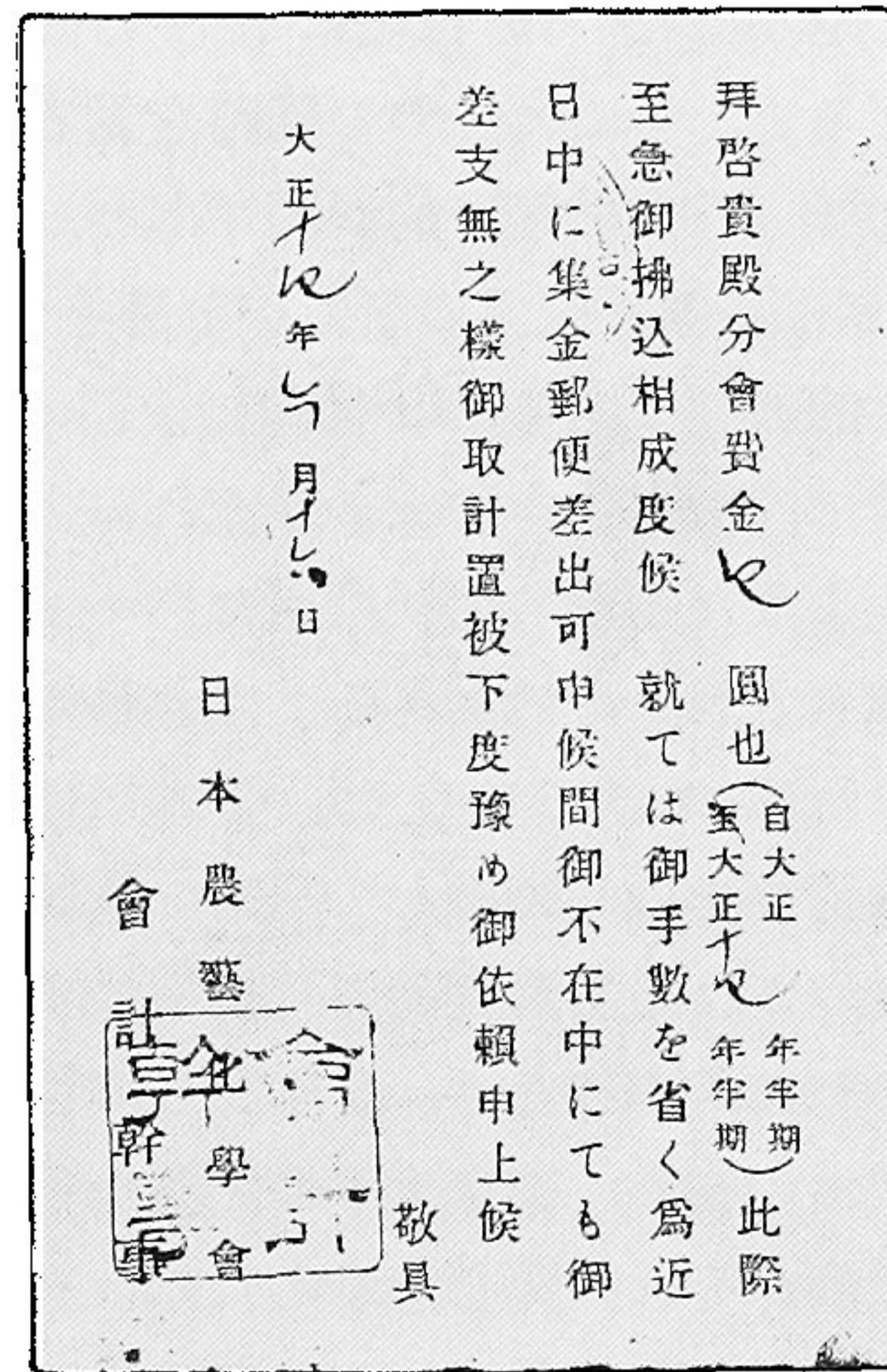
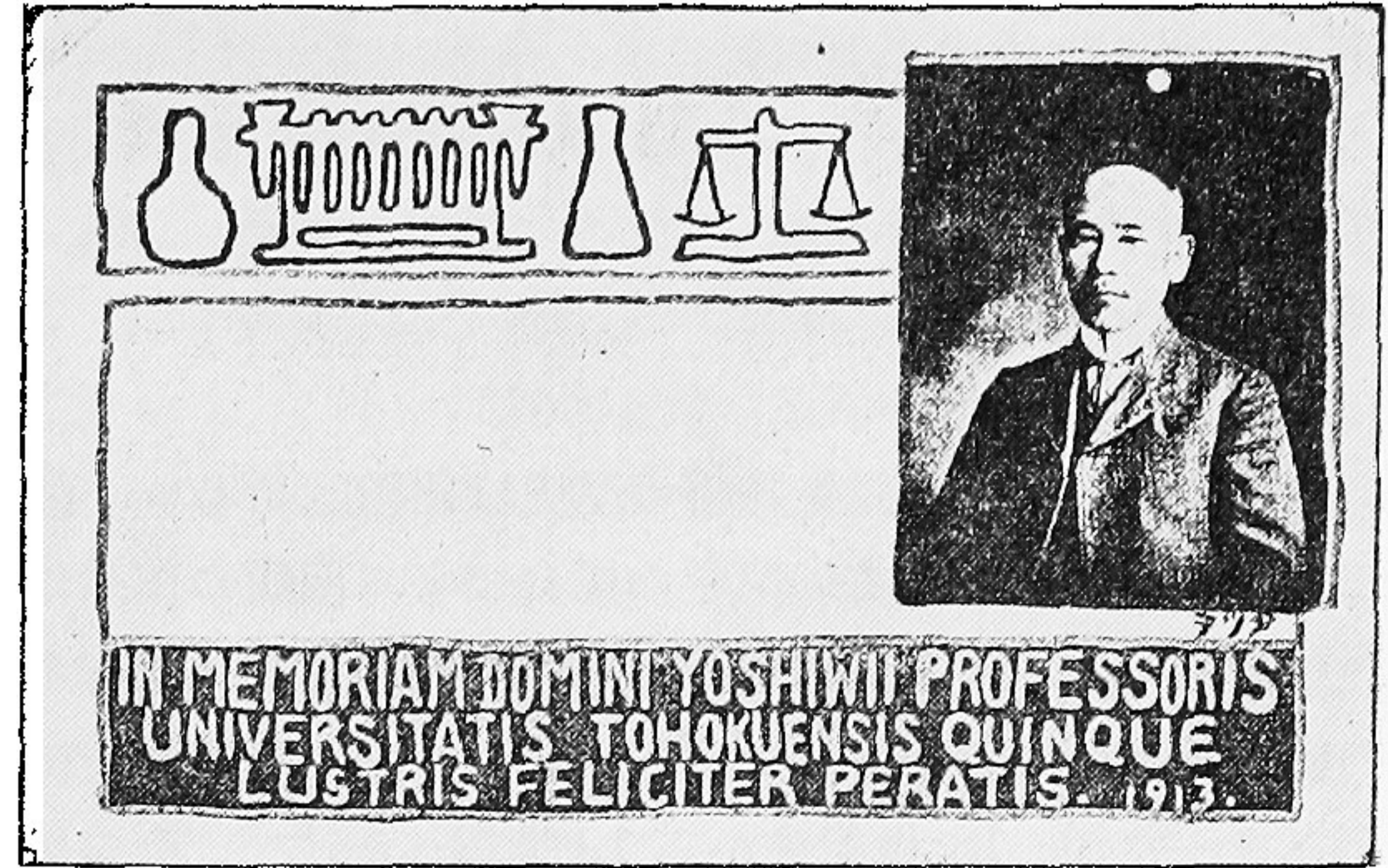
ところで札幌農学校では、教官就任後 25 年を経ると盛大な祝賀会を催し、記念の絵葉書を発行するのが常であった。吉井先生が就職 25 年を迎えたのは大正 2 年 (1913) である。ここに、そのときの先生の絵葉書をお目にかける。

当時の大学教授は、周りの教官や学生から敬愛される度合いも、いまとは格段の違いがあったのであろうか。ともあれ、現在では想像も及ばぬことである。

記録の片隅から

大正 13 年創立当時の日本農芸化学会の会則によれば、正会員費は年額 8 円とある。しかし、そのころの会誌の会費領収報告欄を見ると、半期ごとに納入している会員も多い。

ここに示したはがきは、創立の翌年 6 月、本部から北大に送られてきた会費納入の依頼状である。半期四円也



の文字などから往時がしのばれる。

(高尾彰一)